



1934 (昭和9)年1月1日～ 1935 (昭和10)年12月1日

『家の光』に賀川豊彦の 「乳と蜜の流るゝ郷」が連載され、 空前の人気を博す



監修 **堀越芳昭**
山梨学院大学 元教授

1934 (昭和9)年の『家の光』1月号から、「乳と蜜の流るゝ郷」の連載が始まり、翌1935 (昭和10)年12月号で終了する。連載が始まるや読者から多くの支持を得て、空前の人気を博す。前回は産組運動を担っていた熱血の若人たちを中心とした「読者の声」から、当時この小説が、いかに読者の血を湧かしたかということを確認した。

今回は、当時の産組運動の実務者や農家からどういう声が寄せられたのかをみていく。

今回も当初の連載から約33年後に家の光協会より出版された図書『乳と蜜の流るゝ郷』(1968年)の「発刊によせて」から引用する。

■ 福島県昭和村農協組合長 (連載当時、福島県家の光普及主事) の 渡辺雄晤の投稿から

1935年当時、産業組合中央会福島支会で家の光普及主事であり、1968年当時は福島県昭和村農協組合長を務めていた渡辺雄晤が寄稿している。

(略)「産業組合運動これよりはじまる」の名言を残した組合法発布二十五周年記念の大正十四年からは、組合意識の高揚運動が急速に高まり、さらにまた、その達成方途として『家の光』利用が最捷徑(さいしょうけい)なり、と信じこんだのは、けっして、わたしひとりではなかったはずですが、『家の光』普及部数は、福島県の合計が、昭和五年三月号で、やっと五百三十部

に過ぎませんでした。

それでも昭和八年には、一万六千八百五十三部にはなりましたものの、わたしが計画している三万部には道遠しを嘆いていたおりから、賀川豊彦先生の読み物が連載されるといふ予告がありました。(略)賀川先生の小説といふことで、その期待は、まさに大きかったのですが、林唯一画伯挿絵による『家の光』昭和九年一月号を見たところ、なんと会津磐梯山麓が中心に取り上げられているのにはびっくりしてしまいました。

号を追うごとに、農村青年たちの反響は増すばかり。当時の産業組合福島支会報に下記のような記事を書いて全組合関係と、『家の光』普及組織として昭和八年五月の県下組合大会の議決によって成立した三百七十の「町村家の光青年会」に呼びかけました。

“新社会の曙を語る前に賀川豊彦先生の

乳と蜜の流るゝ郷を読め”

日本九千六百の疲弊した農村を救う者は誰ぞ、日本を永久に金融恐慌より救う者は誰ぞ、それは協同組合そのものだ。家の光連載小説こそは、全国数百万読者の血を湧かしつつある協同組合の大宝典である。

新しき恋愛も新しき道徳も、協同社会より生まれる。この小説を読まずして新社会の曙を語ることは許されない。わが磐梯山麓を背景とした協同組合運動、磐梯山麓に、否全県下に、かくのごとき組合運動者の続出せんことを祈る。

『家の光』は昭和九年八月号二万六千六百五十部、十年八月号で三万三千八百九十六部となり、念願の三万部をやっと達成しました。(略)



連載がスタートした『家の光』1934(昭和9)年1月号(上)

■ 農協組合員である三浦政衛の投稿から

1913年生まれ、1934年当時は青年期、1968年当時は50代の農協組合員であった三浦政衛は、主人公である東助の活動ぶりに共鳴し、次のように述べている。

昭和九、十年当時、わたしの家は水田三・五ヘクタール、畑四十アール。そのうち水田七十アールだけが自作で、一家の生活は最低でした。

イネ作は、冷水と水不足で凶作が続き、(略)わたしは、絶望して、ブラジル移民に出ようと真剣に考えました。が、一人息子であるため、父母のことを思うと、やっぱり、どうしても家を出ることができません。ちょうどそのときです。こんなわたしに希望の光を与えてくれたのが、『家の光』に載りはじめた、賀川先生の小説「乳と蜜の流るゝ郷」でした。

わたしは、主人公・東助の活動ぶりに共鳴して、わたしもまた、人が捨ててかえりみもしない花や草資源を利用し、ミツバチを飼い、乳牛を入れようと決心したのです。隣でも、向かいでも、みんながミツバチを飼い、乳牛を飼うような、そんな農業がやれるようになったら、どんなにうれしいことか。

わたしが、実際にミツバチを手に入れたのは昭和十五年でした。一群からはじめて、一時は十五、六群まで飼いました。ミツバチは、わたしにとって、経済的にプラスになったとはいえませんが、家内じゅうの健康と、もう一つ、イネ作の上に大きなプラスをもたらしてくれました。ミツバチを通じて、県経済課の大屋敷延雄氏や、県農業試験場の山本九郎技師の知遇を受けるようになったからです。わたしたちは、サークルをつくって、真剣にイネ作と取り組みました。十アール当たり“七石の壁”を破って、みごと多収穫日本一となった工藤雄一さんも、わたしたちのサークルのメンバーです。

乳牛を入れたのは、イネ作も安定した昭和三十三年です。一頭の子ウシから出発して、現在五頭にふえています。が、初心忘るるべからず、たいしたことはできないかもしれませんが、この土地に酪農が根をおろすように、けんめいに努力するつもりです。

北秋田の、このへき地に、理想の“乳と蜜の流るゝ郷”を実現するまで！

■ 小説を通じて伝える「日本を救うのは産業組合」

産業組合青年連盟全国連合が千石興太郎を委員長として結成されたのが1933(昭和8)年4月である。この時の構成員数は2万5000人にすぎなかったが、翌昭和9年10月末18万人、昭和11年9月末37万人と急増している。

この急増は、渡辺さんの文章から理解できるように、産組中央会の道府県支会において青年組織育成の努力がなされていたことによるものであること。さらに、「乳と蜜の流るゝ郷」の内容から青年をひきつけ、それが『家の光』の普及組織としての役割を持っていたことがわかる。また、産業組合福島支会報の「全県下にかくのごとき組合運動者の続出せんことを祈る」でおわる文章は若者向けとして素晴らしい。

三浦さんの文章が琴線に触れるのは、希望の光を与えてくれた「乳と蜜の流るゝ郷」の東助青年の言動を自分の経営で実践し、さらにサークルをつくって地域の農業経営を向上させようとするところにある。

これらからも賀川の「日本は産業組合の外に救ふことは出来ない」という哲学と各種協同組合と立体農業の必要性を説く文章の説得力に魅了された、といえよう。

<参考文献>

『乳と蜜の流るゝ郷』(家の光協会、1968年)